

館長室へようこそ⑦

秋の過ごし方

図書館長 古川 聡

このぼるらんどが発行される頃、世の中は晩秋を迎えているはずだ。食欲の秋、読書の秋、恋の秋、そして勉強の秋。音大では少数派ではあるが、卒論を書いている学生のみなさんは今どのような秋を過ごしているだろうか。大学で助手をしていた頃、秋になると研究室の入口ドアに一枚の模造紙を張り出した。上段には、氏名、序論、目的、方法、結果、考察、引用文献という項目、その下には学生の名前の横に白色の円が六つ並ぶ。それぞれの項目で下書きが書けたら円の右半分を塗り、清書まで終えたら左側も塗りつぶす。私が修士論文を書いていた頃までは、みな卒論を手書きしていたのである。誰がどこまで進んでいるか一目瞭然で、卒論を書く学生にはプレッシャー、指導する大学院生や助手にとっては恒例の秋の風景であった。ただし指導が適切かどうかも見られており、少しでもレベルの高い卒論を書かせようとこちらも多めに励む。序論が不十分だからとアルバイトから戻って来る学生と夜の九時に研究室で待ち合わせ、真夜中まで英語の論文を一緒に読みながらディスカッション。ただ、その後はご多分に漏れず飲んで騒いで、翌朝は反省という毎日を過ごしていた。学生たちが下書きを書いてくると、不適切な表現や意味不明の箇所を赤字で指摘して返却し、書き直させ、それをまた修正ということを繰り返していくうちに、科学的な論文らしい表現に変わっていく。最初は思うような文章が書けずにいた学生が、理路整然とした論文を提出し、自分の言葉で口頭発表をする。指導した側としてはうれしい。社に出ると、このような指導はなかなかしてもらえない。もしあなたの近くに些細なことでも指摘してくれる人がいたら、まずはその人の話にしつかりと耳を傾けてみよう。それが満足のいく冬、そして待ちに待った春につながる。

Parlando のあゆみ

ぼるらんど

その15

Parlando Interview ②

「ぼるらんど」は、新規購入資料の案内リストとして1971年に刊行された「収書案内」から、1976年に館員や先生方の執筆する読み物を加えて「ぼるらんど」と名前が変更となりました。150号(1988年10月)から「収書案内」と分離して利用者の皆さんと図書館を結ぶコミュニケーション雑誌として独立、277号まで刊行しています。250号(2006年)から266号(2010年)まで、14回にわたってこれまでの「ぼるらんど」のあゆみをご紹介します。今回はその15として、251号以降に行われた先生方へのインタビュー記事の紹介をします。

森太郎先生 (251号:2006年) *

淀彰先生 (253号:2006年) *

花岡千春先生 (256号:2007年)

北爪道夫先生 (257号:2007年)

栗山和樹先生 (260号:2008年)

秋山恵美子先生 (264号:2009年)

古川聡先生 (265号:2009年)

永井宏先生 (268号:2010年)

山本英助先生 (272号:2011年) *

大倉由紀枝先生 (276号:2012年) *

※ *印は在庫がありますので、ご希望の方に差し上げます。

※ 閲覧希望の方は、請求記号P1154と希望の号数を書いて請求して下さい。

※ 250号以前のインタビュー記事の紹介は、250号に載っています。